

‘肥のあげぼの’の高品質果実安定生産のための施肥法第1 報

誌名	九州農業研究
ISSN	04511581
著者	土田, 通彦 相川, 博志 上村, 浩憲
巻/号	67号
掲載ページ	p. 196-196
発行年月	2005年5月

‘肥のあけぼの’の高品質果実安定生産のための施肥法

第1報 露地シートマルチ無被覆栽培における施肥法

土田通彦・相川博志¹⁾・上村浩憲

(熊本県農業研究センター果樹研究所・¹⁾ 玉名農業改良普及センター)

Michihiko Tsuchida, Hiroshi Aikawa and Hironori Uemura :

Effective Method of Fertilizer Application for Stable Production of High Quality Fruits of Satsuma Mandarin ‘Hinoakebono’

1. Non-Sheet-Mulching Cultivation in the Open

ウンシュウミカン‘肥のあけぼの’の高品質，連年結果のための施肥時期，肥料の種類を検討した。

1. 材料および方法

果樹研究所内は場（土壌の種類：細粒赤色土）において，1999年～2003年にわたって，1993年4月に1年生苗を定植した‘肥のあけぼの’（89樹/10a）を供試して，高品質，連年結果のための肥料の種類，施肥量および施肥時期等を果実収量，果実品質および樹体生育等から検討した（第1表）。

2. 結果および考察

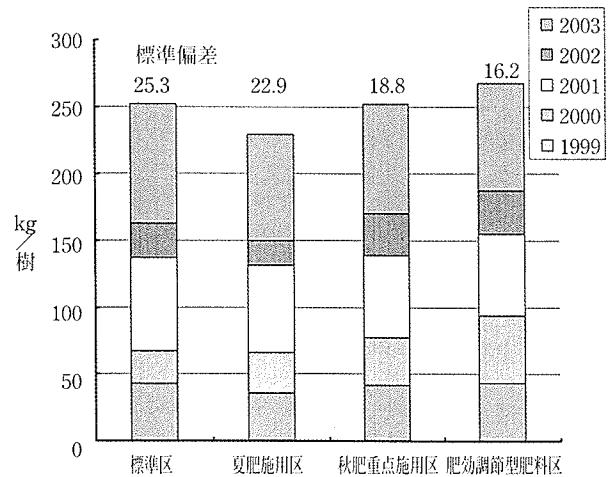
1) 樹容積の伸び率は，秋肥重点施用区と肥効調節型肥料区が大きかった（データ略）。

2) 5か年の累計収量は，肥効調節型肥料区（累計収量指数106），秋肥重点施用区（100），標準区（100），夏肥施用区（91）の順であり，肥効調節型肥料区，秋肥重点施用区では，収量の年次変動が小さい傾向にあった（第1図）。

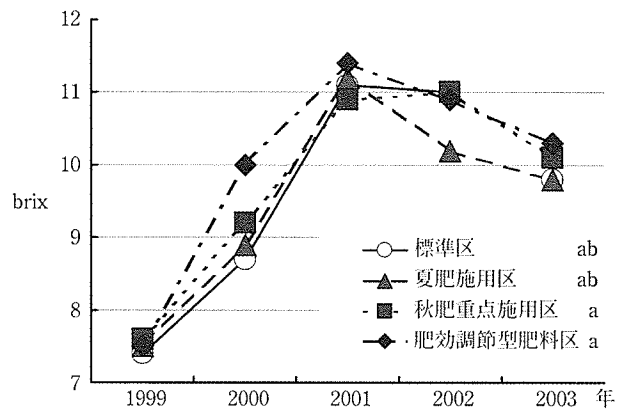
3) 果実品質において，果実の糖度は肥効調節型肥料区，秋肥重点施用区がやや高い傾向にあり，着色は肥効調節型肥料区，秋肥重点施用区が優れた（第2，3図）。果実のクエン酸含量（5か年平均）は，標準区0.90，夏肥施用区0.93，秋肥重点区0.90，肥効調節型肥料区0.94g/100mlであった（データ略）。

4) 肥効調節型肥料8割施用の場合，資材費も有機配合肥料の9割程度である（データ略）。

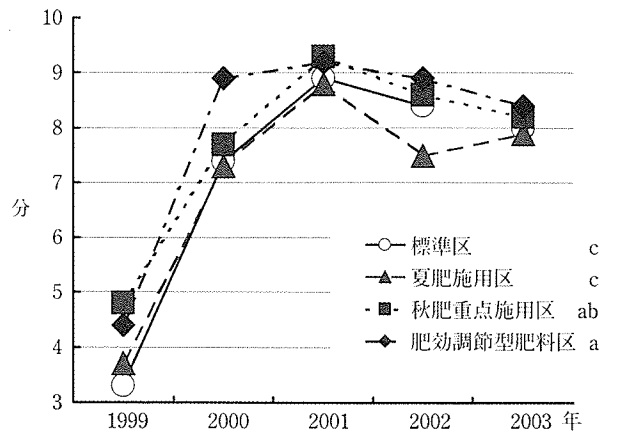
以上の結果から，ウンシュウミカン‘肥のあけぼの’の露地シートマルチ無被覆栽培において，肥効調節型肥料区，秋肥重点施用区が果皮の着色の向上および収量安定の面で優れ，夏肥施用区は劣ることが明らかとなった。



第1図 収量



第2図 糖度



第3図 果皮の着色

第1表 試験区の構成と施肥の内容

区 分	施肥時期と割合 (%)			
	3月上	4月上	5月上	10月中旬
標準区	35	20		45
夏肥施用区	40		20	40
秋肥重点施用区	20	20		60
肥効調節型肥料区				100

注) 標準区等：有機配合肥料：有機率55%。
 年間施用窒素量：14.4kg/10a（高畝栽培のため8割施用）。
 夏肥施用区の5月上旬施肥。
 1999, 2000年：有機配合肥料
 2001年～2003年：硫安
 肥効調節型肥料区：1999年, 2000年は同量施用, 2001～2003年は8割施用。